

稲盛アカデミー活動報告

I. 概要

1. 稲盛アカデミー

昭和30年に鹿児島大学工学部を卒業された稲盛和夫京セラ株式会社名誉会長（鹿児島大学名誉博士）および京セラ株式会社からの寄付により、平成17年に学内共同教育研究施設「稲盛経営技術アカデミー」として設置し、平成20年に「稲盛アカデミー」へ改組した。

稲盛アカデミーは、「世のため、人のために尽くす高い倫理観と進取の精神を持った『21世紀型市民』の輩出を目標に掲げ、地域社会から望まれるリーダーを育成する」ことを基本理念としている。このため稲盛哲学（フィロソフィ）の探究および継承・発展を基盤に据え、人材育成を目指した教育研究および社会貢献（人間教育、経営教育、地域・国際連携）を展開するとともに、名誉博士創設の国際賞、「京都賞」の受賞者講演会や関係行事などを通じた鹿児島県との連携・協働を図っている。

(1) 学内向けプログラム

- ・ 共通教育科目の提供：「稲盛経営哲学」、「進取の精神」などに関わる科目の開設
- ・ 国内体験学習や海外研修などの学習機会の提供
- ・ 京都賞受賞者鹿児島講演会における「鹿児島コロキウム」の開催

(2) 学外向けプログラム

- ・ 「履修証明プログラム」に基づく社会人向けプログラム「稲盛経営哲学」の実施
- ・ 「公開シンポジウム」、「特別セミナー」の実施
- ・ 「稲盛哲学」に関する国内外における研修の支援

2. 稲盛アカデミーベトナム事務所

平成19年に鹿児島大学はベトナム社会主義共和国ハノイ市のベトナム社会科学院と学術交流協定を締結し、その後、ベトナムにおける教育研究及び社会貢献に係る国際活動を推進するために、ベトナム社会科学院から施設の提供を受けて、平成21年6月に稲盛アカデミーベトナム事務所が開設された。

ベトナム事務所には客員教授を配置し、(1) ベトナム社会主義共和国における本学の学生及び職員の教育、研究、研修等、(2) ベトナム社会主義共和国内の大学との共同研究、(3) ベトナム社会主義共和国学生の日本への留学支援、(4) その他ベトナム社会主義共和国における教育、研究および社会貢献に係る国際活動を推進するなど、国際的な交流活動を行っている。

3. 稲盛記念館

「稲盛記念館」は、本学の卒業生で、第一号の名誉博士である稲盛和夫鹿児島大学名誉博士より寄贈いただいたものである。

稲盛和夫名誉博士の長年のご足跡は、まさしく本学の教育理念である「進取の精神」の実践であり、本学学生、教職員、同窓生の誇りとするものである。

この稲盛記念館を、稲盛和夫名誉博士の哲学を学び、知の創造を刺激する場として活用させていただき、世界をリードする有為な人材の育成と地域・産業界との連携強化を図る。

(1) 京都賞ライブラリー（3階）

稲盛和夫名誉博士が私財を投じて設立された「稲盛財団」とその国際賞「京都賞」に関する内容を、パネルや映像等で紹介している。

●京都賞受賞者を中心に広がる世界（正面大型ディスプレイ）

複数名で同時に楽しめる大型インタラクティブ・ディスプレイでは、受賞者を中心に広がる世界を紹介している。浮遊している受賞者のアイコンをタッチすると、幼少期のエピソード、研究のきっかけ、作品・活動、京都賞の同じ分野の受賞者等といった関連するアイコンが集まってくる。

●映像による受賞者の紹介（4本の柱のディスプレイ）

4本の柱に設置されたディスプレイでは、一人ひとりの受賞者を紹介している。画面に触れると、さらに詳しく、プロフィールや業績、インタビュー等の貴重な映像がご覧いただける。

(2) 3階廊下「稲盛和夫名誉博士の歩みと功績」展示コーナー

稲盛和夫名誉博士が経営に携わった企業の紹介、思想、社会活動（母校 鹿児島大学への支援）を、パネルや展示物で紹介している。

(3) 1階－3階正面階段「稲盛和夫名誉博士の歩み 私と鹿児島」展示コーナー

稲盛和夫名誉博士が鹿児島で過ごされた幼少期から青年期の歩みを、パネルで紹介している。

(4) 1階－3階正面階段 閲覧用書籍コーナー

稲盛和夫名誉博士の著作や関連する書籍を展示紹介している。なお、こちらの本は館内でのみ閲覧が可能（持出禁止）。

(5) 1階エントランス メッセージ フィロソフィコーナー

稲盛和夫名誉博士の座右の銘「敬天愛人」（天を敬い人を愛す）が掲げられ、大型モニターにて稲盛名誉博士の紹介映像がご覧いただける。

Ⅱ. 令和3年度の主な活動内容

1. 履修証明プログラム「稲盛経営哲学プログラム」の実施

稲盛アカデミーでは社会人向けに履修証明プログラム「稲盛経営哲学プログラム」をこれまで10期にわたって開講してきた。

履修証明プログラムとは、1つのテーマで60時間以上のプログラムを実施し、受講生には学校

教育法第105条により、そのプログラムの履修証明書が授与されるというものである。

内容は「稲盛和夫の歩み」や「実学—経営と会計—」、「アメーバ経営論」などを中心としたもので、第4期からは実際に企業経営に当たられる実務家の講師による「実践経営論」、第5期からは客員教授による「稲盛フィロソフィ」を加えている。

これまで349名の修了者を輩出し、企業や地域社会において本プログラムで学ばれたことを活かした実践をされている。

2021年度は10期目となり、進取の精神を涵養し、経営者や地域社会のリーダーとして活躍する人材を養成することを目的に、2021年9月から15回、総時間90時間開講された。修了者は約6ヶ月にわたり、『稲盛経営哲学の成り立ち』、『稲盛和夫の歩み』、『実学—経営と会計—』、『経営12カ条』、『アメーバ経営論』、『実践経営論』、『稲盛フィロソフィ』の7つの科目を体系的に学び、稲盛経営哲学の理論と実践の両面について幅広い知識を修得した。

第10期履修証明プログラムの開講内容は下記のとおり。

講義名	時間数	担当講師	備考
稲盛経営哲学の成り立ち	4.5 時間	武隈 晃 吉田 健一	
稲盛和夫の歩み	10.5 時間	吉田 健一	
稲盛和夫の経営問答	6 時間	吉田 健一 劉 美玲	共同担当：園田 博昭
実学—経営と会計—	10.5 時間	吉田 健一 劉 美玲	
アメーバ経営論	25.5 時間	劉 美玲 吉田 健一	工場見学6時間を含む。 共同担当：園田 博昭
実践経営論	9 時間	吉田 健一 (責任者)	ゲスト講師（企業経営者等）6名による講義。
稲盛フィロソフィ	24 時間	日置 弘一郎 高 巖 三矢 裕 青山 敦	客員教授4名による講義。
合計	90 時間		

令和4年3月5日には「稲盛経営哲学プログラム」（第10期）修了式をZoomによる遠隔式にて開催し、23名が修了した。修了式では、武隈 晃 稲盛アカデミー長より修了者一人ひとりに履修証明書の読み上げを行った。続いて、佐野 輝学長の挨拶（代読）では、「今後、企業経営、地域社会のリーダーとして地域活性化の原動力として活躍されることを心よりご期待申し上げます」と、お祝いの言葉を贈った。また、武隈アカデミー長からは、「今回の稲盛経営哲学の、稲盛経営哲学に関する、稲盛経営哲学の視点からの学びが、皆様方の今後の経営活動、職業生活や地域生活、地域経営のより堅固な礎となることを切に願う」との挨拶があった。

2. 稲盛アカデミー公開シンポジウムの開催

稲盛アカデミーでは、稲盛和夫名誉博士の経営哲学とそれに基づく成果を広く社会に開示する公開シンポジウムを開催してきた。

第9回シンポジウムは、令和3年12月5日に「利他の経営—稲盛経営哲学の真髓を学ぶ—」を

テーマに開催した。

第1部の基調講演では、共著書『利他の構造』（ミネルヴァ書房）を令和3年10月に刊行された日置 弘一郎氏（京都大学名誉教授、本学稲盛アカデミー客員教授）をお迎えし、演題「利他について」をご講演いただいた。

日置氏は「利他」概念について歴史的な考え方の推移を紐解き、その後、近代日本の資本主義の父である渋沢栄一にも言及され、「社会性を帯びた事業で利益をあげることは利己ではない」旨を説明された。そして、渋沢 栄一、松下 幸之助、稲盛 和夫名誉博士へと続く、経営者に共通する経営の本質について講演された。

第2部の前半では『利他の構造』を共同で執筆された奥野 明子氏（甲南大学経営学部教授）、寺本 佳苗氏（麗澤大学経済学部准教授）、中尾 悠利子氏（公立鳥取環境大学経営学部准教授）、李 超氏（近畿大学経営学部准教授）、栗野 智子氏（株式会社ウエイアンドアイ代表取締役）から著書の中の自身が執筆された部分についてのご報告をいただき、様々な視座から「利他」概念を考究する材料を提供していただいた。

その後、第2部の後半では稲盛和夫研究会・経営哲学分科会会長の田中 一弘氏（一橋大学大学院経営管理研究科教授）から全体についてのコメントをいただいた上で、前半の報告者の「利他」概念への質問を投げかけていただいた。さらに田中氏からは「利他」の概念にもいくつもの段階や種類があるのではないかとの問題提起をいただいた。その後、田中氏の質問に執筆者が答えるという形でパネルディスカッションが展開された。

「利他」は稲盛和夫名誉博士の経営（または稲盛フィロソフィ）の重要なキーワードであるが、今回のシンポジウムでは、「利他の経営」の意味するところについて参加者とともにさらに思索を深める貴重な機会となった。

これまでのシンポジウムの開催年月日とテーマは下記のとおり。

回	開催年月日	テーマ
第1回	2015年2月15日	「経営哲学の浸透—JAL 再生を題材として—」（1）
第2回	2015年9月12日	「経営哲学の浸透—JAL 再生を題材として—」（2）
第3回	2016年2月14日	「経営哲学の浸透—JAL 再生を題材として—」（3）
第4回	2016年9月30日	「稲盛フィロソフィは、なぜ社会を動かせるのか」
第5回	2018年2月11日	「地域産業・中小規模組織と稲盛経営哲学」
第6回	2019年2月2日	「稲盛思想を紐解く」
第7回	2019年12月13日	「京セラフィロソフィに学ぶ —企業は如何にして発展を遂げるのか—」
第8回	2021年2月21日	「コロナ禍における企業（組織）の危機管理とフィロソフィ」 （特別セミナーとして開催）
第9回	2021年12月5日	「利他の経営—稲盛経営哲学の真髄を学ぶ—」

3. 稲盛アカデミー叢書 第2巻を刊行

稲盛アカデミー客員教授の日置 弘一郎氏と奥野 明子氏、寺本 佳苗氏、中尾 悠利子氏、李 超氏、栗野 智子氏との共著『利他の構造』がミネルヴァ書房から令和3年10月30日に出版された。本書は思想史的側面から説き起こして「利他」の概念を哲学的に検討したうえで、具体的な企業事例を計量的な分析も加味しつつ考察し、経営における「利他」のあり方について、根本的な原理からその実際に至るまでを幅広く論じる、稲盛経営哲学の学術的分析の試みの書となっている。

4. 稲盛アカデミー研究紀要 第11号の刊行

令和4年3月に「稲盛アカデミー研究紀要」第11号を刊行した。第11号では、所属教員の論稿と共に「コロナ禍における企業（組織）の危機管理とフィロソフィ」をテーマに開催した令和3年2月の稲盛アカデミー特別セミナーの第1部の吉川 晃史氏による特別講義Ⅰ「事業継続に向けたBCPと組織作り」と佐々木 郁子氏による特別講義Ⅱ「コロナ禍の管理会計の役割を考える：東日本大震災の実証研究との比較」、第1部のプレゼンテーションリレー、第3部の特別講師とプレゼンターによるディスカッションを収録している。

5. 共通教育科目の開講

令和3年度は「稲盛和夫のリーダー論」、「アメーバ経営」、「農家民泊体験講座」など15の共通教育科目を開講している。

「大学と地域」の中では「稲盛フィロソフィ」の講義も開始されている。「大学と地域」は鹿児島大学に入学した全ての新生が1学年時に受講する科目である。郷土鹿児島が生み出した経営者である稲盛和夫名誉博士のフィロソフィに関する講義が入れられたことにより、鹿児島大学に入学した全ての学生が稲盛名誉博士の基本的なフィロソフィに触れることができるようになった。

6. 京都賞ウィーク特別企画展を開催

京都賞は京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫氏により設立された稲盛財団が運営し、科学や文明の発展と人類の精神的深化高揚に著しく貢献した人々に贈られる国際賞である。

第36回京都賞は、先端技術部門が材料化学分野のチン・W・タン博士（化学者）、基礎科学部門が地球科学・宇宙科学分野のジェームズ・ガン博士（宇宙物理学者）、思想・芸術部門が映画・演劇分野のアリアヌ・ムヌーシュキン氏（演出家）の3名が受賞された。

京都賞ウィーク期間の令和3年11月15日～12月15日に、稲盛記念館3階において、ファカルティラウンジを中心に第36回（令和3年）京都賞受賞者の紹介や、稲盛和夫氏の歩みなどを、パネルや写真、展示物で紹介した。

7. 学生海外研修「進取の精神海外研修 in ベトナム」の実施

稲盛アカデミーでは、学生海外研修「進取の精神海外研修 in ベトナム」を平成26年度から実施している。本授業の目的は、鹿児島大学教育目標に則し、向上心をもって自ら困難に立ち向かう態度（進取の精神）を養い、グローバルな視野をもち、国際社会の発展に貢献できる実践的な能力を育むことである。

授業では、まず、本学が先人より引き継ぐ「進取の精神」を理解するために、本学の歴史や日本の近代化を推進する過程で多くの困難に果敢に挑戦した鹿児島の若者について学ぶ。日本と同様に中国より仏教や文化が伝播したベトナムでは、ベトナム国民は長い間、中国、フランスによる長期間の侵略やベトナム戦争に堪えた後、現在、国土の復興と産業等の振興に懸命に取り組んでいる。

さらにベトナムを直接訪問し、農業、産業、工業などベトナムの様々な取り組みを実際に体験し、様々な立場で国の発展を支えている多くのベトナム国民と交流する。また、稲盛アカデミーベトナム事務所日本語・日本事情を学び本学への留学に果敢に挑戦する若者や、ベトナム支援

活動等を行っている日本人の若者とも交流する。

これらの事前事後の講義や現地での体験学習を通じて、ベトナム文化、歴史、産業の実態を深く理解し、進取の精神を涵養するとともに、グローバルな視点を持った実践力を育む。

令和3年度は、鹿児島市国際交流財団と連携した県内での代替研修案を実施するために計画・準備を進めていたが、実施予定期間に県内でも新型コロナウイルス感染症が拡大したこと等により断念した。

新たに来年度のベトナムでの研修計画案を検討・作成、共通教育短期海外研修プログラムに応募し、実施が承認された。

鹿児島市国際交流財団とベトナム関連プログラムに関する情報交換を引き続き行い、県内での事前・事後学習の面で連携することを申し合わせた。

また、ベトナムでの実施が困難となった場合を想定し、県内での代替研修案やオンライン等を活用した代替プログラムの検討をした。